

【業績集】

1. 書籍、雑誌

森健太郎, 原淳子: 姿勢と膝関節痛, 理学療法ジャーナル, 2021;55:26-32

2. 学術論文

Yukihiro Shirota, Yuji Hodo, Tatsuo Kumai, Tokio Wakabayashi : Temporary placement of a fully covered self-expandable metal stent with electrohydraulic lithotripsy under direct cholangioscopic control for intrahepatic stones upstream of a stenosis after choledochal cyst excision, VideoGIE 2020 ; 5(7) : 304-307.

DOI : [10.1016/j.vgie.2020.03.012](https://doi.org/10.1016/j.vgie.2020.03.012)

Saiho Sugimoto, Takeshi Terashima, Tatsuya Yamashita, Noriho Iida, Masaaki Kitahara, Yuji Hodo, Tetsuro Shimakami, Hajime Takatori, Kuniaki Arai, Kazunori Kawaguchi, Kazuya Kitamura, Taro Yamashita, Yoshio Sakai, Yukihiro Shirota, Katsuaki Sato, Eishiro Mizukoshi, Masao Honda, Kenichi Harada, Shuichi Kaneko : Tumor lysis syndrome in a patient with metastatic melanoma treated with nivolumab, Clinical Journal of Gastroenterology 2020 ; 13 : 935-939.

DOI : [10.1007/s12328-020-01164-x](https://doi.org/10.1007/s12328-020-01164-x)

Akihiko Kida, Yukihiro Shirota, Taro Kawane, Hitoshi Omura, Tatsuo Kumai, Masaaki Yano, Fumitaka Arihara, Yuji Hodo, Koichiro Matsuda, Kohei Ogawa, Mitsuru Matsuda, Akito Sakai, Mitsuhiro Terada, Tokio Wakabayashi : Long-term outcomes after endoscopic retrograde pancreatic drainage for symptomatic pancreaticojejunal anastomotic stenosis, Scientific Reports 2021 ; 11 : Article number : 4489.

DOI : [10.1038/s41598-021-84024-z](https://doi.org/10.1038/s41598-021-84024-z)

Tsubasa Nishino, Akira Kobayashi, Natsuko Mori, Hideaki Yokogawa, Kazuhisa Sugiyama : In vivo Imaging of Reis-Bucklers and Thiel-Behnke Corneal Dystrophies Using Anterior Segment Optical Coherence Tomography: Clinical Ophthalmology 2020; 14:2601-2607. DOI:10. 2147/OPHTH.S265136

Tsubasa Nishino, Akira Kobayashi, Natsuko Mori, Hideaki Yokogawa, Kazuhisa Sugiyama : Clinical Evaluation of Electrolysis for Reis-Bucklers Corneal Dystrophies and In Vivo Histological Analysis Using Anterior Segment Optical Coherence Tomography: Cornea 2020; DOI:10. 1097/ICO.0000000000002541

Akira Kobayashi, Hideaki Yokogawa, Natsuko Mori, Tsubasa Nishino, Kazuhisa Sugiyama: Graft Edge Reflection of a Tightly Scrolled Roll Using Endoillumination as a Simple Method for Determining Graft Orientation in Descemet Membrane Endothelial Keratoplasty: *Cornea* 2021;40(2):254-257 DOI:10.1097/ICO.0000000000002459

山田圭輔, 管幸生, 高林真貴子, 塩本佑季子, 大西あゆみ, 梅下翔: 石川県で薬剤師と「死との共生」を考える(金沢大学附属病院 緩和ケアセンター報告集), *ペインクリニック* 2021;42(2)265-267

玉谷亮一, 覚知泰志: 機械学習による VAIVT 介入時期の予測, *日本透析医学雑誌* 2020;53:633-638

小川和俊, 玉谷亮一, 林直博, 三島康生, 覚知泰志: シングルルーメンカテーテルを使用した単針血液透析条件の検討, *日本透析医学雑誌* 2021;54:15-20

柿崎亜紗奈, 古矢泰子, 岸谷都: 主体性の低い対麻痺患者に対して ADL 自立の目標設定を共有しながら就労を見据えて介入した一例～回復期から生活期への段階付けた介入を通して, *石川県作業療法学会雑誌* 2020;29(1)29-34

3. 学会・研究会・講演会演者

荒木勉(座長): 金沢心臓弁膜症座談会, 令和 2 年 9 月, 金沢市.

荒木勉(座長): 慢性心不全セミナー, 令和 2 年 11 月, 金沢市.

荒木勉(座長): 糖尿病ウェブセミナー, 令和 2 年 12 月, 金沢市.

荒木勉(Closing remarks): 高血圧治療 Web Seminar, 令和 2 年 12 月, 金沢市.

荒木勉(座長): 生活習慣病を考える～地域連携を踏まえて～, 令和 3 年 2 月, 金沢市.

荒木勉(講演): 病院裏の駐車場から「いしかわ PCR 検体採取センター」へ～当院が果たした役割について～, 石川県医師会・病診連携の集い, 令和 3 年 2 月, 金沢市.

荒木勉(講演): 利尿薬内服中の高血圧患者における尿酸管理, 第 5 回北陸高尿酸血症セミナー, 令和 3 年 2 月, 金沢市.

荒木勉(講演): 高齢者の心房細動診療～心不全・癌・認知症の場合～, 心房細動 Web Seminar(CareNet), 令和 3 年 3 月, 金沢市.

方堂祐治(発表), 竹田康人, 代田幸博, 若林時夫: 閉塞性黄疸で発症した下部胆管上皮内癌の一例, *日本消化器病学会北陸支部 第 130 回支部例会*, 令和 2 年 11 月 1 日, 福井市.

代田幸博(発表), 竹田康人, 方堂祐治, 若林時夫: 胆道鏡下電気水圧衝撃波破碎術が有効であった三管合流部嵌頓結石の一例, *第 115 回日本消化器内視鏡学会北陸支部例会*, 令和 2 年 11 月 29 日, オンライン開催.

代田幸博(座長): 早期胃癌の内視鏡診断, *日本消化器内視鏡学会 第 29 回北陸セミナー*, 令和 2 年 12 月 9 日, オンライン開催.

田中悠貴子(発表), 藤澤雄平, 荒木 勉, 若林時夫, 竹田康人, 方堂祐治, 代田幸博: 好酸球性胆管炎を合併したと考えられた好酸球性多発血管炎性肉芽腫症の 1 例, *日本内科学会北陸支部主催 第 243 回北陸地方会*, 令和 3 年 3 月 7 日, オンライン開催.

森奈津子, 小林顕, 横川英明, 藤村茂人, 西野翼, 杉山和久:膿疱性乾癬へのアダリムマブ投与後に重症角膜パンヌスが生じた1例, 角膜カンファレンス 2021, 令和3年2月, オンライン開催.

川北整(発表), 岸谷都:臨床的にまたは社会的に難渋した大腿骨近位部骨折2例—症例報告—, 第57回日本リハビリテーション医学会学術集会, 令和2年8月19日-8月22日, 京都市.

川北整(発表), 岸谷都:治療に難渋した、骨粗鬆症にともなう大腿骨近位部骨折2例—症例報告—, 第22回日本骨粗鬆症学会, 令和2年10月9日-10月11日, 神戸市.

齋藤優生(講師):ELNEC-J コアカリキュラム看護師教育プログラム～臨死期のケア～, 令和2年9月, かほく郡.

齋藤優生(講師):金城大学成人看護学実習Ⅱ～緩和ケアの実際について～, 令和3年1月, 金沢市.

齋藤優生(発表):第6回北陸緩和医療研究会～シンポジウム 緩和ケアチームのこれまでとこれから～, 令和3年7月, 福井市.

松田澄子(講師):成人看護学Ⅲ「骨・関節・筋疾患患者の看護」講義, 石川県立看護専門学校, 2020年11月, 金沢市.

出村充恵(講師):成人看護学Ⅲ「骨・関節・筋疾患患者の看護」講義, 石川県立看護専門学校, 令和元年11月, 金沢市.

家重恭子(講師):成人看護学Ⅲ「骨・関節・筋疾患患者の看護」講義, 石川県立看護専門学校, 2020年11月, 金沢市.

北川カズ美(シンポジスト):周術期管理チームに必要な多職種連携と看護記録, 第34回日本手術看護学会年次大会, 令和2年10月, オンライン開催.

島崎沙織(発表):病棟における吸入手技の現状把握と吸入指導推進のための検討, 第30回日本医療薬学会年会, 令和2年10月, オンライン開催.

古本真由美(発表):2019年度石川県病院薬剤師会 医療・医薬品安全に関する調査報告, 第33回中小病院薬剤師研修会, 令和3年3月, 金沢市.

西村達也(発表):シームレスな地域連携を目指すための第一歩～退院時薬剤管理サマリーを活用した当院の取り組みの現状と課題～, 石川県病院薬剤師会 令和2年度第1回(通算第170回)学術研修会, 令和3年3月, 金沢市.

梅下翔(講師):緩和ケアで使う薬, 石川県かん安心生活サポートハウス学びの会「薬剤師さんと仲良くなろう!」, 令和2年12月, 金沢市.

森戸敏志(座長):令和2年度 第1回臨床実習委員会研修会 金沢, 令和2年11月, 金沢市.

森戸敏志(座長):金沢市北西地区 糖尿病ウェブセミナー, 令和2年12月, 金沢市.

森戸敏志(演者):第4回生活習慣病を考える～地域連携を踏まえて Web 講習会～, 令和3年2月, 金沢市.

森戸敏志(座長):石川県病院薬剤師会学術講演会, 令和3年2月, 金沢市.

後藤義之(講師):第42回新任薬剤師研修会, 令和3年1月, 金沢市.

後藤義之(講師):PS 講座ネクスト「感染症1」, 令和3年3月, 金沢市.

後藤義之(発表):当院看護師を対象にした点滴静注抗菌薬適正使用に関する現状調査, 第30回日本医療薬学会年会, 令和2年10月, オンライン開催.

泉由樹(発表), 間所昌嗣, 森健太郎, 岡田俊, 橋場照人, 原淳子, 坂本咲, 南朱香:前足部切断後の患者に対して、術部保護と歩容改善を目指して介入した一例, 第 29 回石川県理学療法学会大会, 令和 3 年 2 月, 金沢市.

大島早佑梨(発表), 浦田恵, 山川友和, 森健太郎, 米倉佐恵, 西祐生, 富澤のどか:感覚障害を呈した橋出血患者に対し運動学習に着目して介入した一例, 第 29 回石川県理学療法学会大会, 令和 3 年 2 月, 金沢市.

4. その他

梅下翔(外部評価者):薬学共用試験・客観的臨床能力試験(OSCE), 北陸大学薬学部, 令和 2 年 11 月, 金沢市.

角紀一郎(外部評価者):薬学共用試験・客観的臨床能力試験(OSCE), 北陸大学薬学部, 令和 2 年 11 月, 金沢市.

後藤義之(非常勤講師):北陸大学薬学部 医療薬学 循環器, 令和 2 年度, 金沢市.

森戸敏志(臨床准教授):金沢大学医薬保健学域薬学類, 令和 2 年度

森戸敏志(寄稿):週刊薬事新報(8月13日号), 医薬品 SPD と薬剤師業務(11), SPD スタッフと協働して実現した業務効率化

【院内研究発表会】

地域包括ケア病棟開始後の回復期リハビリテーション病棟の変化

リハビリテーション部 山川友和

【目的】

これまで当院回復期リハビリテーション病棟（以下、回復期リハ病棟）には、他院または院内急性期病棟で治療を経た患者が早期の在宅復帰、社会復帰を目的に転棟されてきた。そんな中、2017年7月より①急性期からの患者の受け入れ、②在宅療養の患者等の受け入れ、③在宅復帰支援を目的に地域包括ケア病棟が開始された。このように院内急性期病棟から転棟する選択肢が増えたことで、回復期リハ病棟にどのような変化があったのか振り返る。

【方法】

地域包括ケア病棟が開始される前後の回復期リハ病棟の年間入棟患者数、1日平均入院患者数、新規入棟患者における重症者の割合、疾患構成、整形外科疾患（TKA術後、THA術後、脊椎圧迫骨折、大腿骨骨折）の患者数、入棟時・退棟時のFIMとFIM利得、平均在棟日数、実績指数の推移を算出した。

【結果】

地域包括ケア病棟開始後、回復期リハ病棟の年間入棟患者数、1日平均入院患者数は減少傾向にあった。新規入棟患者数における重症者の割合に大きな変化はなかったが、疾患構成では脳血管疾患を算定する患者の割合が増加し、整形外科疾患（TKA術後、THA術後脊椎圧迫骨折、大腿骨骨折）の患者数は、地域包括ケア病棟開始を境に減少を示した。

また、回復期リハ病棟の平均在棟日数は70日前後と大きな変化はなかった。入棟時・退棟時のFIMは低くなってきているのが現状である。

【結論】

地域包括ケア病棟開始による回復期リハ病棟の変化は、年間及び1日の入棟患者数の減少や疾患構成の変化にあらわれていた。今後、年間入棟患者数や1日平均入院患者数、実績指数をあげていくためには、急性期からの転院、転棟を的確かつスムーズに行い、充実したリハビリテーション医療の提供、社会福祉のバックアップが必要と考える。

その一方で、数字だけの視点ではなく、質的な要素も考えていくことでスタッフの働く意欲に変化が生じるものとする。当院の回復期リハ病棟は何を大切にして運営していくのか、そのために必要な人的資源や環境整備は整っているのかも並行して考えていく必要があると思われた。

薬剤管理サマリーを介して退院後の薬物療法を支援できた一例とその取り組みに関する課題の検討

薬剤部 ○西川 達也、室田 恵里、橋本 夏恵、梅下 翔、清水 翔子、島崎 沙織、青木 理恵、
茶野下 貴恵、松岡 未紗、古本 真由美、岡田 久美、角 紀一郎、後藤 義之、森戸 敏志

【目的】

病院及び施設間の連携を図るため薬剤部では2020年3月より薬剤管理サマリーの作成を順次開始した。2021年1月からは全病棟で可能な限り作成を開始している。今回薬剤管理サマリーを介して退院後の薬物療法を支援できた一例を経験した。今後更なる支援に繋げるために現状把握及び課題検討を目的として薬剤管理サマリー運用状況の調査し、状況を報告する。

【症例】

90代男性、他院からリハビリ目的で当院転院。他院からの持参薬は朝食後の降圧薬と就寝前の睡眠薬であった。入院中に主治医と協議して睡眠薬は自宅での服用法と同様に頓用に変更し、降圧薬は他院処方を継続していたが、コンプライアンス不良であったため家族管理可能な夕食後へ変更とした。退院時にサマリーを介して保険薬局に情報提供を行った。その後、薬局薬剤師がかかりつけ医に対して処方提案を行い、服用時を夕食後に統一し、問題なく服薬継続できている。

【方法】

2020年3月～2021年1月のサマリー作成患者を対象とし、作成先を調査した。取り組みを促進した1月に関しては退院患者数に対する全体の作成率を求め、また、各病棟薬剤師からサマリー作成時の問題点を調査した。更に、保険薬局に対しては退院後の服薬状況を確認のため返答を要求し、返答件数を調査した。これらは作成したサマリー及び電子カルテで後方視的調査を行った。なお、検査・PTA・白内障手術・処置のみのパス入院は服薬状況の変化がないことを確認し、今回は対象から除外した。

【結果】

対象患者数は129人、平均在院日数44.4日、平均年齢79.8歳であった。作成先は病院32件、保険薬局56件、施設34件、ケアマネジャー12件、訪問看護師2件であった。1月の全体でのサマリー作成率は28%(50件/170人)で病棟薬剤師からは急な退院・同意拒否・院内処方でも薬局経由しないなど作成困難な患者がいる一方、薬剤師の担当患者数が多い状況で1人当たり30～60分程度作成に時間を要すると、それに伴いその他の業務に影響が出るため作成困難となるなどマンパワー不足も挙げられた。また、保険薬局からの返答は9件と少ない結果となった。

【考察】

取り組み開始から退院後の薬剤管理に関わる施設に対して幅広く情報提供できたが、作成率は28%であり、複数の原因や問題点を挙げる事ができた。更に、保険薬局からは返答が少なく、連携を強化する必要があると考えられる。様々な退院、転院先の薬剤管理を行う施設との双方向な連携を推進するため、サマリーに記載する内容の統一化による作成時間の短縮、薬局間との具体的な記載内容の検討など課題や疑問に対して改善を実施し、退院後の薬物治療支援に繋がりたいと考える。

慢性心不全患者の現状と当院の課題 ～慢性心不全看護認定看護師の立場から～

看護部 ○高平真理奈、松田美紀 診療部 荒木勉

【目的】

日本の心不全患者は2030年には130万人に増加し「心不全パンデミック」が予測されている。心不全は増悪と寛解を繰り返しながら、徐々に重症化する経過を辿る。患者が心不全を増悪させることなく質の高い療養生活を過ごせるような支援が必要である。

今回、当院の心不全患者の現状を把握し、今後の心不全看護の向上に繋げる目的で本調査に取り組むことにした。

【方法】

2018年1月から2020年12月までの3年間に当院で心不全と診断され入院した患者172人を対象とし、在院日数・再入院率・死亡率などを電子カルテから後方視的調査を実施し、データから当院の心不全看護の課題を抽出した。

【結果】

内科の全入院患者に対する心不全患者の割合は2018年6.3%、2019年5.1%、2020年5.3%であり、平均在院日数は32日、平均年齢は84.8歳(男性83.2歳・女性85.9歳)であった。対象患者の再入院率は12.7%であり、半年以内の再入院は8%、1年以内の再入院は11%であった。院内死亡率は12.7%であった。

【結論】

日本の大規模な観察研究と比較して、当院の心不全患者では、①平均年齢が高い、②再入院率が低い、③院内死亡率が高いという結果が得られた。再入院率が全国平均に比べて低い理由は、高齢の心不全患者では、継続した心機能の観察や全身管理が必要となり、療養型病院などへの退院が多いことが推測され、院内死亡率が高い理由として、心不全の高齢患者が最後の看取りを当院で迎えている現状が推察された。当院に入院する心不全患者では平均年齢が高いことが、①や②に関与している実態が明らかとなり、特に高齢患者への心不全に対する支援の強化の必要性が示唆された。

高齢の心不全患者では、長期にわたる疾患の管理や医療デバイスなどの課題から自宅での受け入れが困難となるケースが多い傾向にある。外来から継続した心不全の管理と本人や家族への指導、療養場所などに対しての意思決定支援を多職種連携にて行うこと、終末期心不全患者では緩和ケアが主体となるため、心不全の緩和ケアの拡充にむけた、院内の人的な資源の活用と協働などが今後の課題である。

【はじめに】

当院では、摂食・嚥下障害の方に対して統一した食事の提供がなかったため個別対応で「刻み」「ミキサー食」などを栄養給食部に依頼していた。

このため、安全に摂取できる食事を作成する目的で、多職種(医師、看護師、管理栄養士、言語聴覚士、薬剤師、医事課事務職、医療安全管理者)によるチームを2007年に結成し、摂食・嚥下チームが発足した。このチームの活動を紹介し、このたび「摂食・嚥下ケアの手引き」を発行することになったので報告する。

【活動経過】

摂食・嚥下障害の方のために嚥下食Ⅰ～Ⅴを作成し、嚥下機能が改善するにしたがって段階をあげていくようにした。入院時に適切な食事形態を提供できるようにスクリーニングを行い、誤嚥のリスクを減らすようにした。しかし、当初は嚥下食の周知がなかったため誤嚥リスクのある人にも入院時に常食が提供されていることもあった。その後、勉強会を通して口腔ケア、嚥下食、トロミ剤の周知に努め、2011年からは月1回、嚥下ラウンドを開始し、誤嚥リスクのある方の食事の評価をチームで行い、適切な食事形態、姿勢の提案をおこなった。その活動を業務改善発表会で紹介し、嚥下食、トロミ剤の理解が徐々に深まっていった。その後、2013年から摂食機能療法の算定を開始し、安全に食事を摂取できるように院内での活動を広めていった。

【活動を通しての課題】

入院時にリスクのある方を見逃さないようにする必要があり、また院内のトロミ剤が各病棟で統一されていないため統一する必要があった。さらに摂食機能療法の算定が減少していったためこの普及のために食事のみではなく食事前の口腔ケア、口腔の運動の必要性も理解が必要であった。また誤嚥、窒息時の対応マニュアルが作成されていないことも課題としてあがった。さらに転院や施設入所される方に対して当院での食事形態を次の施設に適切に申し送る必要もあった。

【今後の展望】

摂食・嚥下障害の理解を深めるため、勉強会、嚥下ラウンドを実施してきたが、今後も継続して誰もが評価とケアができるように手軽に手に取ってもらえる「摂食・嚥下ケアの手引き」が必要と考え、このたび発行にいたった。これを活用して安全で楽しい食事の提供をこれからも関係者で検討し、活動を継続していきたい。

【看護部事例発表会】

12月3日（木） 17時15分～19時00分

於：第2討議室

NO.	発表名	病棟・発表者
1	倦怠感が患者に及ぼす影響 ～身体的倦怠感と精神的倦怠感～	4A病棟 梶 晃輔
2	痛みを感じている患者との関わりを通して学んだこと	5B病棟 中田希乃芽
3	治療期にある患者の変化をもたらした病棟看護師の役割	4B病棟 埴岡志乃
4	長期入院患者との関わりの中で学んだこと ～服薬場面を通し自分の行動を振り返って～	5B病棟 的場睦実
5	認知機能が低下している患者との関わりの中で学んだ事	4B病棟 長谷川雄大
6	疼痛コントロールにより食事摂取量が増加した患者と関わって	4A病棟 京谷真悠子
7	倫理的ジレンマを感じた家族との関わりを通しての学び	5B病棟 別宗志穂
8	終末期へと移行した患者との関わりを振り返って ～スピリチュアルペインへの看護～	4B病棟 中屋美紅